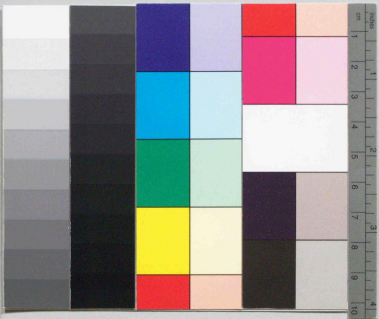


煎茶訣

坤



愛知県文化会館

510832

A791
72
1-2

水石居煎茶訣卷之下

百信先生 口授

門人 藍光河村澄 筆受

○茶の大神農氏の食經（きやうきやう）に凡（たゞ）より漢晋（わんしん）の飲（いん）茶（ちや）飲（いん）衛（ゑい）の
勝（かち）も（と）二（に）も（も）猶（なほ）晨（あさ）星（ほし）のやぐ柿（かき）をりいり唐（たう）の陸羽（りくう）盧全（ろけん）の輩（はい）
並（な）び起（おこ）す（と）より制（せい）茶（ちや）品（ひん）水（すい）器（き）物（ぶつ）の妙（めう）を（と）て大（おほ）備（び）けり遠（とほ）ふ比屋（ひや）の茶
飲（いん）ふ（と）も（と）ら（と）ふ（と）も（と）人（ひと）日（ひ）と（と）と（と）く湯（ゆ）を（と）向（むか）ひ（に）付（け）け（し）五（ご）六（ろく）は（は）こ（と）と（と）ち（と）
思（おも）ひ（と）ち（と）か（と）ら（と）茶（ちや）の起（おこ）源（げん）濫（らん）觴（さう）等（とう）と湯（ゆ）を（と）も（と）つ（と）其（その）の茶書（ちやしょ）の委（あ）一（いつ）と

あう、ばばい、あう、小省まぬ

○彼土の茶書枚舉小違わすくじも考據に便とあらむ便す
 如竹やとりつ、陸羽が茶経茶裏と茶録等とくじりしてはつと
 ふのしつくの工夫後の小注せく茶と製一の茶と好もて其名と云ふ
 と若かりする多く一品小數稱あせど一名小異取の枚ありと
 わり又千載の上り今日小如らみて茶の製枚十變一の茶と
 許多の代好事家思ひく小語とて書と著り茶と製一茶と
 製入の茶と命ト或は酒と假り用ひく其備茶邊一茶とのやうり

くももありたふ杜氏全集小急須相飽飲一斗もあり又三餘
 贅筆のも呼渡酒器為急須のを考ふ小急須の今酒の燭
 ともの急須のなつつ茶器のの思入や小なりのもあせ
 たりばのと少くぬれのて千里の海外のてとてやせの茶後と
 此方に精做して孫の事のなれど心のて茶中のの面目とて
 失のぬやう小折表のもくと肝要のと
 ○皇國煎茶の行の煎茶者流のの賣茶翁のと遊のとて
 陸羽のを今小比煎茶の集のと宜のなり其精行の儉徳高致

○彼未茶家も宋匠の外にまづ且も畢竟清談なれど煎未二茶の
 長あひかりと未茶家動なれど煎茶家と見識のわづあざけりゆ
 とわり予見としてる内同く沈黙して未茶家も亦
 日ふんたさるぬつさしりもわづ

○未茶家 諸器物の製作並用の便利にのみまてるれども其称呼
 の名目或は不協或は文盲かろり少らず煎茶家の諸器物とて用
 便利にふつひふつれども物とてそのまに用入るに體用ともに其
 名と失いずるれ似たりまづろそ布巾も迷々ゆく諸器物の称呼名

上日用小今とて侍とのむサレバ子ば名と中一缺と補ひ多と刑
 きて今日の煎茶家もた今の兼梅被此の吳同りなりとそしゆん
 なえりふ積排嫌慨すろ年久しばころ什グ七まく研究せり
 諸具の形状称呼の吳因泡沬の規則も其ゆゑと因せり未茶則
 世ふ公して因癖初字の人の措けし

○今日の茶の泡沬茶沬茶沖茶の三つよく煎茶なるぬれろと煎
 茶と唱つるありぬろかれと兼泡煎茶と稱して昔よりぬろ
 たり少くぬれりもさし例といふかなんか論治卷の一と二と

乃めと云ん古竹簡の文字と彫り付韋にて是と綴りまこと直ま
 よりつひつひと又申おろりては猶ふ文字とゆふととそを韋も
 紙の末一ほり今のゆふ本に依りて和古林と唱へ巻の一その
 つひ竹簡が紙のつりても脱簡をこつひの煎茶のつひ物とも
 つひ一それだけ茶も一煎二煎と標すとゆふはさゆり味さあ
 初は再延と唱ふるもあまうとまへ

○前の述べゆく泡淹沖の言もさかろくつひの灸法古林と月ひて
 煎點と唱つて是又茶の例やうして辨さるわぬ

○和漢古今の茶書多しとすも大典禪師の茶經詳説を今日
 の煎茶家不益わりのか一揮抄の力量且は清慧の飲切りたり洋説
 と玩味してゆふはまて三谷宗塔が和漢茶法を不詳悉うら
 らか一其書文章小力と錫すのこつひ伏雲の考定おまじり
 せりこら未茶家のゆふ編りれ煎茶家不益うらと口惜一なれ茶
 法ゆめら茶法と陰とて傳真おくとも又誰かや茶不珠光と茶
 一人獨歩と稱まこと彼未茶者流さか小き伝せまらうてこ

○上田徳高が清風瑣言海のちさかきうとすも考按お心と用ひ

されば其書國字とてははるねとて初まのふ茶をくにけりき
 飯敷ありとてはも指言小比を且は替わりとて最下の書ふ即ちてハ
 煎茶仕用集を題号之種必小搦法あり利害と論するまで
 とうとうのふあふなり

○煎茶家小ニわり下文人茶ハ俗人茶ハ孔門の科目ハ
 君子儒ハ小人儒とのやうなる小等ハとて俗人茶ハ俗人之ゆ何
 中とりて文人茶ハ茶飲清事の生類とて主りて澹泊と甘んす俗
 人茶ハ此清事淡泊の二徳を解せ彼主とて目的のけは邊茶俗人

茶小陸落沈論とて永劫洋び流るるをわたりしれ

○文人茶ハ其點法も主重量をたひて自ら規則と設け諸哉簡潔
 の古とて失はぬとて主し俗人茶ハ主茶葉茶法わたりて拙と規則
 とてて茶の印可と推して謝儀とてとて或ハ其點何十通り
 ありの又ハ出行草の作ありのものと唱へ門戸とてはくものありある
 人のまづ小入とて是も習法ハの印可と受けしはく小徳とて
 持後ハも搦ぬぬありとてなり初とて是も茶葉んとてハ茶葉家規
 規則ハの作人茶小比をハ万倍の全備年々しく和光同産の妙極

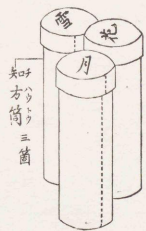
茶趣ふむをひ多減うりも俗語の者ほとと云々のにふく次と考へ
 ○尤も茶寮の掛幅小曲を河津陀佛親世吉井の佛号
 及び佛画うとわびせんかまき茶にて肉食せんぬ令一
 かねばうりつとくださかりキダ木石居小園のおくく陶
 像の観音大士とあそみと并眼佛うり浴とあれもけ茶小
 て肉食へ似念ぬゆを茶飲とれかうり次帷帳と下り
 後河内と高ふとてなぬたも掛幅玩具木の位置あて
 主人のこゝろ見え申さるればうりんとあてらるり

附録 品茶圖解 七 煎注



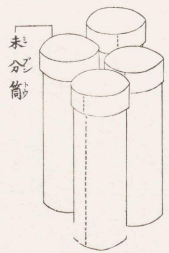
品茶楊枝も品茶標とも称す一あり小園せもハ予が用つ所なりてふも
 宋の代ふ雪月花竹と四婢類とすて見も小假用するり予を梅竹蘭菊
 何なりともあそみ余とてすとすれあよりこれとてけらむだも標目り
 ろりさるり○あしハ次の品茶決もお照して名趣とて得とへ

知方筒ハ三ツのて圓の
 おく雪月花の三字と
 蓋の上小池一内小三種
 の茶と清もも花とと
 小三煎して風味と飲り
 悦えわうりば試し茶と
 既濟茶とよべ

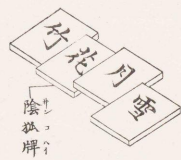


未分筒ハ四ツのて雪月

花竹の四字と一茶蓋の
 裏小記一蓋四種の茶と次
 小抄乱の意して飲もも
 茶
 此四種と未濟茶と
 一と一としてふくは
 雪月花の三種と種茶
 竹の一種と單茶と唱
 少だ

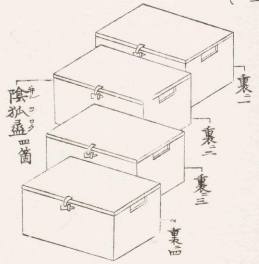


陰孤牌一圓のゆく雪月花竹の四枚の裏が一の字のし記で四枚見と一人前として上若くは後より一人四枚雪月花竹の四枚の裏は二の字と記より四枚戸二若くは後より戸三戸四戸五と記しても皆此例なり



陰孤盆四ツの裏は一ニ三四と記し直さ品茶一煎と飲

もなり時一の品と上客（初上）
 客我馬ふ牌一枚とよみ
 法客（わく）より戸二
 煎より四五ましくいして
 飲單り後ハ盆を寄せて
 優劣とをむと品茶
 清風の一場とすなり
 但一圓のおともを置きて
 竹筒をて用ゆる陰孤盆
 としハ



品茗衛藏録の圖の如く
 竹月花堂の如く
 飲中もこれを得全
 礼雪は鶴茶と用ふ
 扇西小の時も圖
 盟の此扇西と人
 全の人の贈と

品茗	竹	月	花	堂	の	如	く	飲	中	も	こ	れ	を	得	全	礼	雪	は	鶴	茶	と	用	ふ
扇	西	小	の	時	も	圖	盟	の	此	扇	西	と	人	全	の	人	の	贈	と				

附 品茗圖解 五章法

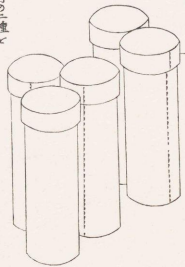
品茗

彼土小松竹梅の類
 梅竹松或いは竹松梅
 小字梅竹抄と用ふ
 支那の見や



未分筒

五竹筒
五竹筒の蓋裏の梅の字と
あそび筒二筒竹の字と記
せん二筒松の字と記せら
一筒より此法は五筒とも
そより次は竹筒の蓋
ト五筒の茶のいそぎ
後一時の牌と入りたり梅竹の三種と
複茶と稱し松の一種と單茶と云此法は既濟未濟の區け

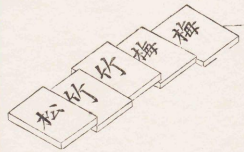


未分筒 五筒

陰孤牌

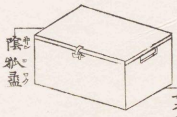
陰孤牌とは圓のいそぎ五枚と
して一人分は是も牌の裏
か一の字と記せる五枚二の字と
記せる五枚もて各例七葉
は山用トくは四枚と五枚り
遠ひわりのいそぎ一

陰孤牌



陰狐蟲ハ七煎法不用しもの
申ヤたてて一六と用ハナリ
所ハ固もまじ啼てて承す

品茗輪廊録ハ七煎法のヤ
方小准としてを題目とせしむ
されが畧してこふハ固也



東五

陰歌盤

附録 品茶訣

百信先生 口授

門人

藍光河村澄

筆受

○品茶近來の清飲やて未茶家の茶は、聞香者流の規則より
わたりて空やを遊びなれぬありて、法則をうけてみても思ひ
小意点置候風流と便利とを音とすきりて、彼土東代の關茶
飲ハヤとて、珠ホトトとを、是又關茶といふ味遠く關茶ハ自れ
不茶と製一丈と湯く持ちありて、互小茶の品格と通、准の製茶の

亦一准の茶ヲカニと云やテ小泉テ評テとて茶の上下と飲多テと今テ製茶
 小浴テ肯折テも及テ半テ字テ作テかやも茶師テと云テく茶テと動テく
 窮テより數品テの茶テと買テり五煎法テ或テ七煎法テなどテりテ小泉テを
 一テ飲テらテせテまテ茶テを飲テあテるテと獲テり飲遠テ一テ日テと湯テとて
 持テづテるテやテちテりテもテ類テさテり關茶テの按テひテりテ不テ学テの人の誤テひ
 中テ待テ小テ節テ悟テあテりて一テ症テの奥テおもテらテれテ平テも又テはテ飲テとあテふテとテり
 てテ丸テ光テ同テ産テの一テ助テとすテ

○此の如く述テくテくテ呂茶テハ近來テの事テとてテもテ他テまテれ行テぬテるテ

ちテれテはテふテとテ不用テくテ茶テあテりテとテ稱テすテのテ名テとテうテてテいテとテ抽テきテりテ小テ泉テ
 ちテ一テとテ小テ泉テとテ併テけテ圓テかテとテとテとテ附テりテ此テ置テもテ思テはテせてテいテさテりテ其
 俗病テとテ留テせテんとすテ

○呂茶會テ小テ客テ折テひテもテ防テ生テらテ上品テの茶テと一テ煎テりて一テ巡テ再テ巡テり及テよ
 是テとテ症テ是テ茶テとテりテ下テ一テ二テ飲テすテとて又テ新テのテ茶テとテ補テひテ諸テ茶テあテと
 情テ慮テりてかテ五テ煎テ法テ七テ煎テ法テのテ法テをテとテりテたテ簡テ潔テとテちテりて
 鄙俗テ小テ泉テらテぬテるテも肝テ要テとテはテ然テとテりて又テ別テのテ一テ煎テのテ茶テとテりテすテ
 是テとテ投テ轄テ茶テとテりテすテ

清事餘韻

百信居士著

常茶雜詩二十韻

侈富何為羨，羨廉貧豈足憂。憂僮奴皆可逐，我有
酪蒼頭

日日吾何服，陶家換骨湯雖非，非求羽化應是
不羶腸，
不須七碗多，茶是真丹液，所以無籟風習習
生兩腋。

溺神絕酒者不許過，吾家峻節鳴謙士，來而
喫我茶，

不論點淹煎，茶中有秘訣，精行儉德人，唯能
知其說，

客至消孤悶，餅鳴吐煖香，便論茶品格，這裡
沒炎涼，

如有六羨水，而逢七廢地，應知嗜好，感能受
茶神賜，

一餅三四椀，斯是喫茶場，有暑無炎熱，吾唯

愛日長，
為主且為賓，三五同癖，士品茗數杯，飲其爭
也君子
異世而同癖，殊疆且等，倫癖倫誰似者，紗帽
籠頭人
一日一書生問我泡茶訣，除却百易難，秋應
要簡潔，
焚香引餘清，插花免塵俗，僅有箇香花爰初
茗事足。

失真求浮偽，莫以陷茶魔，炫奇張威福，莫為
茶修羅。

詩書閒雅，友木石不言，師師友能如是烹茶，
更待誰。

一碗齒牙香，三杯肺胃涼，如是茶功德何為，
可不常。

得茶真趣者，能知茶真味，得知元無他，勉在
省冗費。

高眠晏起，餘暇茗二三盃，平生不平事，盡向

毛孔散

獨自泡淹去，數碗喫，香肆，枯腸何所有，文字
五千卷

杉栝青竹箸，沙罐白瓷甌，如斯茶飲畢，於我
復何求

裁詩償宿債，下直脫官纏，我以斯時服，最知
茶有權

木石居煎茶訣卷之下終

跋

茶有煎末之二流，而煎末亦各有二派，一雅
潔是，為文人茶，一倍茶是，為野人茶，兩近
今之煎茶家多陷于俗，於末茶家亦然，
末茶非予所論及也，所謂俗茶遠罪，盧
陸迫流高為我，百信先生慷慨于此久矣，
予從遊先生于經藝之次，每聽辯論，道

茶之雅俗，從錄從筆，以藏諸篋中，而刀圭
之餘暇，編次爲二冊子，以備先生之清
鑑。且乞梓以博于同好。先生鼓掌曰：是
救病之人，又將爲醫家之位，歟。不圖仁術
之至于茲言畢，先生莞然，印可所乞。

嘉永二年杪冬

藍光河村濟并錄



兼葭堂藏本
介翁茶史

全貳冊 定價五拾錢

明治三十七年二月讓受

名古屋市橫三ツ藏町

尾張書肆

梶田勘助

愛 知 県



1105108324

791

72

1-2